



宇宙に消えたアイソン彗星と次世代4K放送

本コラムのテーマをどうしようかと思悩んでいたさなか、とても興味深いテレビ番組を見た。NHKスペシャル「宇宙生中継～彗星爆発太陽系の謎」だ。言わずもがな「アイソン彗星」の誕生から死への旅を取り上げていたのだが、この番組のもうひとつのテーマが、今最大の技術的トピックスである4Kなのだ。

アイソン彗星は遙か宇宙の彼方から100万キロにもおよぶ旅を続け、去年の9月、木星周回軌道付近を飛行している時に発見された。この12月頃太陽に最接近し、予測では金星や月並みの明るさになる可能性もあると言われ、一方で太陽の熱で消滅する危険性もあるとも言われていた。今世紀最大の宇宙ショーとして世界中の人たちが、夢とロマンを重ねつつその到来を待ちわびていた。

11月29日に太陽に最接近（近日点：太陽表面から約117万K）すると言うことで、その前後には地表から肉眼でも見えそうだと、11月半ば過ぎ頃から多くの人達が明け方の東の空を見上げていた。野次馬精神旺盛な筆者も、寒い朝の5時前に寢床を抜け出し東の空を見上げたが、残念ながら肉眼では見つけれなかった。ところが、彗星の飛行を継続して綿密に観察していたNASAが、アイソンは太陽に最接近した後、予測に反してか予想通りか、あるいは期待に反してか、太陽コロナの熱により氷塊からなる彗星の核は分解し、崩壊し消滅したと発表した。彗星の飛ぶさまを見たいとの夢はあえなく潰え去った。

実は筆者は、この映像アラカルト欄の10月号で、「華麗なる宇宙ショーに思うこと」と題し、アイソン彗星のことに触れていた。その中で、アイソン彗星を昨今の大きな技術トピックスである4Kカメラで撮影する試みが計画されていることを書いた。8月上旬、種子島から打ち上げられたH2Bロケット4号機に積み込まれた宇宙ステーション（ISS）補給機「こうのとり」には、高感度化された4Kカメラ“EOS C500”（キヤノン）と4K SSDレコーダ（アストロデザイン）が搭載されISSに届けられていた。12月上旬に彗星が最も明るく長い尾も見えるタイミングにあわせ、ISSに搭載している若田飛行士がこの4Kカメラで撮影することになっており、それをNHKは生中継することになっていた。ISSから地球へ4K直接伝送はできないので、HDにダウンコンして地球に伝送し、12月4日総合テ

レビで生放送する予定だった。またSSDバックに記録された4K映像は、地球帰還後に編集され、来年正月の特番として放送される予定だった。日本の最先端技術の粋を集めた宇宙ショーの中継だけに筆者ならずとも期待していた。

しかし、アイソン彗星はギリシャ神話のイカロスのように、太陽に近づきすぎあえなくも消滅してしまった。NHKは急遽、当初のタイトル「遭遇！ 巨大彗星アイソン」を「宇宙生中継～彗星爆発と太陽系の謎」に変え、予定通りスペシャル番組として放送した。当初の目的は達成されなかったが、番組の中では4Kカメラの威力は存分に発揮されており興味深く見た。

若田さんはこの4Kカメラで消滅する以前のアイソンの雄姿やオーロラの映像を撮り事前に地球に送っていたので、番組の中で再生し見せてくれた。もちろん予定通り実際にISSと繋いだ生中継も行われた。ISSは放送の時間帯、アメリカ西海岸から太平洋上に出て日本の方向に飛行していたようで、北米や北海道付近の地上の都市部の明かりが見事に映されていた。地表から400キロ離れたISSとの生中継の掛け合いだけに、電波伝搬に伴う時間の遅れが気になったが、それこそ宇宙との生中継を感じさせる臨場感だった。この生中継番組で見せてもらった他にも膨大な4K映像がSSDレコーダに記録されているだろうから、1月予定されている特集番組で披露されることを期待している。そこではおそらく4K映像の持つ威力、魅力が大いに発揮されるであろうと思っている。

ところで、アイソン彗星の話がかしましくなる少し前、10月の東京国際映画祭に8KSHVドラマが初登場し、11月武道館で開催されたアリスライブ公演は次世代放送推進フォーラム（nexTV）主催によりスカパーJSAT経由でお台場シネマメディアージュに4K生中継された。そして今回のISSからの4K生中継である。これらに見られるように、次世代放送4K、8Kに向けた動きが急速に高まっている。この1月にはソチオリンピックがあり、引き続きブラジルでワールドカップサッカーが開催される。これらスポーツ競技では大画面に耐える高精細度で迫力、臨場感溢れる4K、8K映像が大きく威力を発揮するはずである。現にnexTVフォーラムが描くロードマップでは、2014年ワールドカップを機に4K試験放送開始、2016年リオオリンピックで4K本放送と8K実用化試験放送開始が予定されている。そして昨年9月のIOC総会で2020年東京オリンピック開催が決まり、次世代放送にとって大きな推進エンジンになるはずである。しかし次世代放送が真に定着するためには、何よりも放送の利用者たる視聴者が理解し受け入れるかどうかにかかっていることは言うまでもない。

再びさきの特番に話を戻そう。番組の中でも語られていたが、悠久の宇宙が営々と繰り返している壮大な現象を見るにつけ、地上で繰り返られている人間の営みはなんと小さく愚かなものだろうか。それを思い知らされた番組だった。（虚数）